

# Barデラスとお客さん

コーヒー中毒社会

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

夢の中には不思議なお店があるらしい。これはbarデラスとその店主によるちよつとした一幕

# 目次

B a r デラスとお客さん	1
不老不死の少女	5
ヘステイアファミリア	8



# B a r デラスとお客さん

夢それは意思あり自ら考える事のできる生き物が見ることの出来るもの。良いものも悪いものもありとあらゆる物を体感できるもの。そして夢の中にはb a rを営む男性がいると言う。あつた人曰く落ち着く雰囲気をしている、曰く彼にとつては隠し事をしても全てがお見通しである、曰く：：そう彼への評価が無数に上がるだろう。夢にすむ彼の名前はベルモンド・バンデラス。b a r デラスを営む男性である。そして今日もまた一人夢に迷い今を悩むお客がb a r デラスへ訪れる。

「いらつしやいb a r デラスへようこそ」

## 第1話

ベル・クラネル

「あれ?ここどこだろう?ここはお店?」

「おや?めずらしいお客さんだね、いらつしやい少年」

ベルモンドの前に現れたのは白い髪にルビーのような赤い目をした十代半ばの少年だった

「ここは何処なんですか?さっきまで僕はベットで寝てたはずじゃあ」

「おつと紹介が遅れたね、ここはbar デラスそして俺はこの店主をしているベルモンド・バンデラスだ改めてよろしく頼むよ少年」

「あつはい、僕はベル・クラネルです。よろしくお願ひしますそれでbar って言つてましたけどさつきも言つた通り僕はベットで寝てたはずなんですけど」

「ああそうだった説明を忘れていたね、君の体はどこにも行つていないさ。ここは夢の中さだからこれは君のみている夢だ。まあほらそこに座りなよベル？」

「そう言つてベルモンドはカウンター席を指差す。ベルはそれにしたがつて遠慮しながら席についた」

「それじゃあ、初めてのお客さんにはサービスしようか」

「そう言つと彼は奥の棚から明らかに年代物だと思われるウイスキーを出して、グラスに注ぎ自分の前とベルの前にコトリと置いた」

「こつこんな高そうなお酒、僕お金持つてないですよ!!」

「お金なんか気にするなよ少年、それにおれも呑みたいから開けたもんだしなあ、と言うわけで少年乾杯しよう、今回の出会いに乾杯」

「かつ乾杯」

「それでベルくん見たところ君は悩みがあるんじゃないかい？浮かない顔してるが」

「わかっちゃいますか、あはは」

そう言つて頭を掻きながらベルは口を開いた

「僕には仲間がいるんです、でもその仲間は捕まつていて助け出したくても相手の言つていることが正しくて……僕どうすればいいんでしょう?」

「なんだ、そんな事か」

「そんな事つて何ですか?! リリはこうしているときにも?!」

「まあまあ、最後まで言わせろ少年。そのリリつて娘はそこに居るのが嫌つてちゃんと言つてたんだな? そして少年はその娘を助けたいんだろ? だったら簡単だ、助けにいいばいいじゃないか? 人生は短いそれに君は仲間を思う心のある優しい人だ。だから好きなように動け!! 君はその娘を助けたい!! それだったら全力を尽くして助けに行け!! それが男つてもんだぜ少年」

「つ!! はい!! わかりました!! マスター!! ありがとうございます!!」

ベルがそう言うのと急にbarのドアが開き周りが明るくなつていく

「おっと、もうお目覚めの時間みたいだなベル少年」

「そうみたいです、ベルモンドさん」

「最後にこれを持っていきな」

そう言うのとベルモンドはカウンターからダイヤモンドで出来たブレスレットをベルに渡した

「なっ何ですか？これ？」

「ん？こりやお守りみたいなもんだ。幸運を祈るぜ少年。そしてまた会おう」

「わかりました!!また何処かで!!」

そう言うトベルは足元から消えていく。だが顔には吹っ切れたような晴れやかな顔が広がっていた

「行ったか…しかしアイツからは懐かしい気配を感じたなあ。元気にしてっかなあ？ツインテールの嬢ちゃんは」

そう言うト彼はグラスとウイスキーを片付け始める

個々はbarデラス悩める人がたどり着く特別な場所彼はいつでも新しいお客を待っている



# 不老不死の少女

「お邪魔しまーす」

ここはBarデラス出会いと別れをくれる夢の中Bar今日のお客さんは久遠千歳、不老不死の少女だ

「いらつしやい久遠の嬢ちゃん、所で何かあったのかい？嬉しいような寂しいような顔してるけど」

「ベルモンドさん、私やつと不老不死の呪いが解けるみたいです… だから配信も引退しようって決めました」

「そうか… おめでとう久遠嬢ちゃん。やつと普通の女の子に戻れるって訳だ」

「はい、でも正直いつて私も寂しいです。何やかんやで半年間ですかにじさんじの皆と殺し屋の皆と色々やれて楽しかったなって、もう影廊は勘弁ですけど」

「ハハハ、確かにあの時の久遠の嬢ちゃんは色々ヤバかったなあ。所で引退する前の最後の配信はどうしようって考えてる？」

「私は、明るく行くこうって考えてますここ一ヶ月配信もできなかつたしツイッターもあり動かせてなかつたけど、最後は私は幸せに普通の女の子になるんだ、皆と一緒に歳

をとれるんだって言うてくるつもりです。私はあまり寂しいの好きじゃありませんから、最後は寂しいに包まれた配信にならないようにします!!」

「そうか、頑張つてな久遠の嬢ちゃん。」

「はい!!」

「にじさんじ引退しても俺の店には何時でも来ていいよ、成長して年取つて綺麗になつてくのを見せに来てくれよ久遠の嬢ちゃん。それにここにはいちごの嬢ちゃんもよく来るんだ、久遠の嬢ちゃんも仲良かっただろ、引退してもいちごの嬢ちゃんに会いに来てやつてくれ」

「あまりシワシワになつたのを見せるのはちよつと嫌ですけど… まあそうしますよ。いちごちゃんにも会いたいですし」

「久遠の嬢ちゃんはダイヤモンドちゃんを持つてるだろ?」

「勿論です、今日もそれ使つてここに来たんですから」

「あれは、願つたときにちゃんと此所に来れるようにするために触媒みたいなもんだから無くしたら言つてよ?」

その後も夢の主と普通になりかけの不老不死の少女との他愛のない雑談は続く他のライバーの事、視聴者の事、普段の生活の事でも、ここは夢いずれは覚める

「私、そろそろ起きますね配信の準備とかやらなきや」

「おう、行つてらつしやい久遠の嬢ちゃんまた来てね」

「ええ、また来ます」

そう普通になりかけの不老不死の少女は夢から覚めた、呪いの解けた彼女はこれからきつと幸せに普通に歳を取り普通に死んでいくのだろう

「でも、また長生きな人が減つちやつたなあコレはお祝いすべき事なんだけどやっぱりすこし寂しいなあ」

生き物が夢を見始めた頃から存在する彼は多くの出会いと別れを繰り返してきたのだろう、彼女もまたその一人だがすこし他の人よりいる時間が長すぎた、長い時間共に居たのだから思いも多いコレには夢の主も堪える。しかし彼は祝福する。彼女に幸福な死をと

その後、白い髪に花のアクセサリーを着けた女性が時折 *Bar* デラスに訪れたと言  
う、それは彼女の顔にシワがいつぱいになるまで続いたと言う

## ヘスティアファミリア

「ふわああああ、おはようございます神様」

夢を見た次の日の朝、ベルが目覚めると手には夢の中で貰ったブレスレットが握られていた

「ああっ!!おはようベルく…ん!!いつ!!一体何処でそのブレスレットを手に入れたんだい!!」

「このブレスレットですか?」

「そうそう!!そのブレスレットだよ!!」

「これはリリを助けに行く前の日に夢の中である人から貰ったんです」

「ベツベルくん!!」

「はっはい!!」

「その人ってbarをやつてて、やけに渋い良い声で悩み事とかを聞いてくれる人じゃなかったかい!!」

「はっはい、そうですけどもしかして神様のお知り合いですか?」

「そうだよ…でも彼は下界に降りてきてる殆どの神様よりも年上だよ、それに神様で

もないし」

「そつそんなすごい人だったんですか!!」

「うん!! そうだよ!! そしてそのブレスレットは何時でも夢の中で彼のお店に行けるようになる一品でね、一部の神様が死ぬ気でも欲しがるものだよ!!」

「神様はブレスレット持ってなかつたんですか?」

「持ってたけど天界に置いてこないといけなかつたから泣く泣く手放したんだけどまさかベルくんが気に入られるとはね」

「気に入られる?」

「そう!! 彼は気に入った人にしかそのブレスレットは渡さないんだ!! これで毎晩彼のところでお酒が飲めるぞう!! それにファミリアの皆もつれていけるんだ!!」

「みんなとあのお店に行けるんですか?」

「そう!! そのブレスレットには彼のところに行けると言うのは話したけどブレスレットの持ち主が寝る前に一緒にいきたいと願った人も一緒に行くことができるんだ!!  
くうううううう!! 言つてて楽しみになつてきた!! 今夜は皆と一緒に極上のお酒の  
見に行こうじゃないか!!」

「僕も楽しみです!! 神様!!」

——夜——

「ベル様、突然リリ達を呼び出してどうしたんですか？」

「そうだけベル、まさかまた何かまた厄介事じゃないだろうな？」

「そうです、ベル殿まさかまた何か事件ですか？」

「違うよ、今日は皆と一緒にお酒を飲みに行こうと思うんだ、夢の中で」

「二夢の中(ですか) あゝ?」

「そうだけ!!皆!!」

「ヘステリア様? いったいどういう事ですか？」

「今ベル君が持つてるダイヤモンドのプレスレットがあるだろう」

「はい、それがどうかしめましたか？」

「あれは、1種のマジックアイテムみたいなものでね、あれの持ち主が願うと一個に付き何人でも夢の世界にあるbarに夢の中で入れるんだ」

「と言うわけで、僕が皆と一緒に行きたいって言ったらヘステリア様も賛成してくれたんです」

「と言うわけで先に伝えた方が良いと思ったのと、折角だから皆で一緒に寝ようと思って広間に皆を集めたわけです。」

「と言うことで早速眠って皆で一緒に飲みに行こう!!」

「おっおい!!ヘステリアさま!!まったくしょうがねえなあベル!!その話本当なんだな」

「うん本当だよ。実はリリを助けに行く前に一人でそのbarに夢の中で迷い混んでてね、その時に相談にのつてもらったときにこのブレスレットを貰ったんだ。マスターはとても優しい人だから大丈夫だよ？だからおやすみ皆も早く来てね〜」

——そして皆が夢の中へ——

「ほっほんとにあつたんですね」

「どうやらほんとのようですね」

「マジかよ」

「ホラホラ、早く早く入り口で立ち止まってるのでさっさと入ろうぜ皆!!」

そう言いながらヘステイアがドアを開ける

「いらつしやい、barデラスにようこそ、っとヘステイアの嬢ちゃん久しぶりだね、やっぱリベルの坊やと知り合ってたか。そして後ろの3人もベル君のお友だちかい？」

「ふふくん僕の眷族であり家族なんだぜベルモンド!!」

「そっか、そっか〜前まで一人で寂しいっていつて愚痴愚痴いつたヘステイアの嬢ちゃんも成長するんだなあオジサン嬉しいよ」

「こっコラー!!そんなことまで言わなくて良いだろ!!それにいつの話してるのさ!!それはまだ僕が天界に居た頃の話だろう!!」

「あつはっはごめんごめん、後ろの初見さんお名前を聞いても良いかな？」

「リッ、リリルカ・アーデです」

「俺はヴェルフ・クロツゾだ、ヴェルフって呼んでくれクロツゾは好きじゃないんだ」

「自分はヤマト・命です」

「リリの嬢ちゃんにヴェルフの坊やに命の嬢ちゃんか、じゃあ改めて俺の名前はベルモンド・バンデラスニコbarderasでマスターをやってるよろしくな」

「おい、マスター!!俺たちはもうそんな歳じゃないぜ!!」

「はっはっは、俺からしたらお客さんは皆坊やに嬢ちゃんって言える歳さ。それでベルの坊やが友達を連れてきたって事は前話してた救出作戦は成功したのかい？」

「勿論ですよ!!皆のお陰でリリを助けることができました!!」

「おっそりやめでたいな!!今日はお祝いだな!!ここに有るなかでも良いヤツを出そうか」

そう言つてベルモンドは棚の中から何本か見繕つて酒瓶を持ってきた。その酒瓶はどれも美しく装飾されておりどれも最上級の品であるとわかる

「ほら、こいつをどうぞ。どの酒も俺が選んだ一級品だ」

「いいえリリ、お酒は...」

「そうかい?まあ酒を断るのは大体想像できてたけどね」



「どうしてですか？ バンデラス様？」

「だつて嬢ちゃんが多分ここに来る前にそうだなあ一週間以内にソーマの坊主の酒を飲んだらう？ そして精神的にかなりキツイ思いをしたはずだ」

「?! どうしてそれを知っているんですか?!」

「ん？ まず嬢ちゃん体からはヘスティアの嬢ちゃんの加護に隠れてソーマの坊主の神威が感じられるからな。まあここにいて事はソーマの坊主の酒を飲んで耐えることが出来たつてことだ十分スゴいことだぜ。ホラよ嬢ちゃん酒を入れてないノンアルコールカクテルだ。」

「お酒の入つてないカクテル？ なんとと言う名前なんですか？」

「このカクテルの名前はシンデレラつて言うんだ。嬢ちゃんにピッタリだと思つてね」

「どうしてですか？」

「まずはこのカクテルの作られた由来から話そうか、このカクテルはお酒の飲めない人でも楽しめるようにと考へて作られたものでね、それで嬢ちゃんみたいにお酒を飲みたくないつて人にはこのカクテルを出すようにしてるんだ。一人だけ楽しめないのは嫌だらう？ それにカクテルには花言葉のようにカクテル言葉と言うものもあつてね、それは『夢見る少女』つて言うんだ。今までの悪い夢から覚めて新しい良い夢を見つけた記念にね」

「ねえベルモンド!!」

「どうした? ヘステシアの嬢ちゃん」

「今日つれてきたファミリアの皆に1番合うと思うカクテル言葉のカクテルを作ってみてくれないかい?」

「いいよ、まずはベルの坊やから作ろうかベルの坊やはそうだなハイランドクーラーかな? カクテル言葉は憧れだ。君は今憧れて目指しているものがあるだろう? それを目指すための応援に爽やかな気分になる一杯を」

「わあ!! ありがとうございます!! ベルモンドさん!! 僕頑張ります!!」

「次はヴェルフの坊やだ。そうだなあヴェルフの坊やにはコイツかな?」

「へえ、これは何て名前なんだ?」

「コイツはアラスカって名前でカクテル言葉は『偽りなき心』だ。キリツとした味わいと甘さを感じる一杯でな、坊やの普段のキリツとした姿と心の中の優しさ、そして鍛冶にたいする、偽りない心にびったりだと思ってな」

「そんな正面から言われると少し照れるなまあ、ありがたく受けとるぜありがとよマスタ」

「次は命の嬢ちゃんにしようか、命の嬢ちゃんはそうだなあコイツにしようか」

「これは... リンゴの香りがしますが」

「そう、そいつの名はビッグアップル。カクテル言葉は『強さと優しさ』って言ってな。嬢ちゃんみたいな自分の芯がしつかりあってなおかつ優しい心も持つてる娘にちょうどいいかと思ってるね」

「しかし、自分はそのような言葉が似合うほど上等な人間ではありません.:」

「いいやそんなことないさ、そこまで自分を卑下するものじゃないぜ」

「ベルモンドの言う通りさ、命くん!!最初は色々あったけど君もリリを取り返すのに協力してくれたじゃないか!!」

「はっはっは、仲が良いことは良いことだな。さてヘスティアの嬢ちゃんは今日はどうする?流れで合うカクテル言葉のカクテルを頼むかい?それとも昔のお気に入りにするかい?」

「じゃあ僕は昔のお気に入りにするよベルモンド」

「あいよ、ホットのマリブミルクだ」

「待ってました!!ベルモンド!!」

「はっはっは、ゆっくり呑みなヘスティアの嬢ちゃん」

「んく.:.んく.:.プハアやっぱりベルモンドの作るマリブミルクはいいなあ体の芯から暖まる感じがして」

「はっはっは、嬉しいな全員にお酒も渡ったようだし、ほらツマミだ」

そう言ってベルモンドは、様々なチーズが盛られたお皿をヘステイアファミリアの面々の正面に置いた

「改めてだ、皆ゆつくり呑みな。お酒が欲しかったら言ってくれまだまだお代わりはあるからな」

そのまま、にぎやかで和やかな雰囲気のままヘステイアファミリアの面々はBarデラスで呑み明かし翌朝目覚めると全員の枕元にダイヤモンドのプレスレットが置かれていた。これでまた一人Barデラスに常連客が増えたのだった。はてさてお次はどの世界からどんなお客さまが来店するんでしょうか？